



# 栗

3月9日

Sudden Fiction Project

高階經啓  
hirotakashina

## 3月9日のおはなし「栗」

一匹の栗鼠が、夢中になって木の実を埋めていると上から大きな声が轟いた。

「誰に断った？」

栗鼠はびくっとし、顔を上げた。相手があまりに大きすぎて栗鼠にはそれが何者なのか、最初はわからなかった。それは栗鼠の上に黒々と覆いかぶさり、視界を遮り、晴れ上がったいい天気のはずの秋空をすっかり隠してしまっていた。

「誰に断った？」

それは同じことをもう一度言った。長く続く雷鳴のような声。低くゴロゴロと響き、あまりにも大きすぎて割れて聞こえ、あたりの空気をビリビリ震わせる。全身が麻痺して動かなくなってしまったのはその声のせいだ、と栗鼠は思った。実際には恐怖のせいだった。あまりにも大きく圧倒的な存在を前にして恐怖で凍りついていたのだ。

世界が回転し始めたのかと思ったら、その大きなものが動き始めたのだった。たくさんの樹々だと思ったものは、その胴体の模様だった。何本も黒々とした縦線が走っているのでもう少し離れた場所の樹々の幹のように見えていたのだ。あたりのふかふかした土を踏みしめ、表面の枯れ葉を少しかさかさ言わせるだけで、その巨大なものは驚くほど静かに歩を進めた。栗鼠はびくっ、びくっと痙攣するようなしぐさで身体の向きを変え、相手の動きを追おうとした。

突然本当に雷が落ちた。と思ったら、それが吠えたのだった。知らぬ間に栗鼠は倒れていた。あまりの声の大きさに吹っ飛んだらしい。少しだけ小便をもらしてしまった。栗鼠はふらふらと立ち上がりはしたものの、走って逃げることはおろか一步踏み出すことさえできなかった。何が何だかわけが分からないまま泣きそうになっていた。おしまいだ。もうおしまいだ。自分でもどういう意味で言っているのかわからないままそう呟いていた。大きな塊がみるみる迫ってきて栗鼠の身体に触れた。食われる。

「怖いのか」

栗鼠は自分が尋ねられているのだと言うことに気づかなかった。なぜなら自分はもう食べられてしまったはずだと思っていたからだ。食べられてしまった者に「怖いのか」と訊ねるやつはいない。けれど次の言葉を聞いて、どうやらまだ食べられたわけではなさそうだということがわかった。

「小便をもらしたな」そう言うと大きな者はぐわらぐわらと割れんばかりの声で大笑いした。そして胴体の割に妙にしなやかな動きでその場から遠ざかり始めた。離れた場所から見て、初めて栗鼠はそれが虎だったことを知った。虎は振り向くとまた尋ねた。「そんなに怖いのか」

「はい」

「何だって？」

「はい！」

栗鼠は精一杯大きな声で返事した。

「ふん！」

虎が鼻を鳴らすと突風が吹いて栗鼠はまたずっこけた。虎はそんな栗鼠の様子を大して面白くもなさそうに見ながら、その場に腰を下ろし、さらにたたんだ両前脚の上に上体をおさめた。すぐに食べられることはなさそうだとわかり、初めて栗鼠は少し心を落ち着けて虎を眺めることができた。虎はずいぶん年老いていて、毛並みもところどころ薄くなり、もうすっかり艶を失っていた。

「ここはおれの森だ」

静かな調子で虎が言ったが、それでもどろどろと空気や地面を震わせるには十分だった。

「はい」

「だがもうおれの森ではない」

「はい……はい？」

「何をしていた？」

「はい。あっ。わたし、でありますか？」

なんだか変な言い回しになっていることに、栗鼠は自分でも気がついた。

「そうだ」

「栗を、団栗を、埋めておりました」

「どこに」

「えっ？」

「どこに埋めていた」

栗鼠はまわりをきよろきよろ見回して、途方に暮れた。どこに埋めたのか忘れてしまったからだ。たいへんだ、と栗鼠は思った。嘘をついたと思われてしまう。埋めてもいない木の実を埋めていたふりをしたと思われてしまう。栗鼠は焦ってきよろきよろきよろきよろ見回した。虎は肩でふうふう息をしながらそんな栗鼠の様子を眺めていたが、やがて言った。

「どこでもいい」

「はい……えっ？」

「おまえたちはいつもそうだ」

「はい」

「せっせと木の実を埋めるが、埋めた場所のことを覚えていたためしがない」

「えっ？」

言われてみれば栗鼠は、自分が埋めた木の実を掘り返したことがなかった。食べられる木の実はいくらでもあったし、いちいち掘り返す必要がなかったからだと思ったが、ではいざ掘り返すとなったら、あんなにたくさんせっせと埋めたはずの木の実をどこを掘れば見つかるのかさっぱり見当もつかなかった。虎は前脚の上に頭を載せ、目をつぶり眠っているように見えた。けれど再び口を開くと、梢や地面の枯れ葉を振動させながら言った。

「おかげで樹々が芽を出す。お前たちが土に埋めたおかげなんだ」

「えっ？」

「おまえたちの森だったんだなあ」

「えっ？」

「だから」虎はほとんど寝言のような調子で言った。「誰にも断らなくていい」

「……はい」

それからしばらく栗鼠は虎を眺めていたが、虎はもう口を開かなかった。目も開かなかった。ほとんど息をしていないようにも見えたが、あまりに大きすぎて栗鼠にはよくわからなかった。よく晴れた青い空が、樹々の隙間からくっきりと見えていた。枯れ色の葉が何枚か落ちてきて、そのうち一枚が虎の上に乗ったが虎は身動き一つしなかった。栗鼠がその場を立ち去った後も虎はいつまでもそこにじっとしていた。その頃にはもう虎は月の沙漠をわたり、風の平原をわたり、花の谷間を踏みしめ、遠く西の空へと旅立っていたのだ。

(「月の沙漠」 ordered by たいとう-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

栗

<http://p.booklog.jp/book/45834>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/45834>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/45834>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.